日蓮伝承学より観た「宗祖の謎とき」
―消された歴史・日蓮聖人の外護集団―

（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）　石川修道

㈠　はじめに

日蓮聖人の生涯は、鎌倉時代の制度・組織の中で過されている。その表に現れた制度・組織の外に、記録に残されない組織・制度の影響を受けて日蓮聖人は、その時代を過された。また宗祖の消息文に記されない多くの事実もある。例えば宗祖の両親に対する手紙類が一通も現存していないことである。日蓮聖人の宗教の特徴の一面は、両親に対する「孝」である。立教開宗の理由の一つとして、法華経を「内典の孝経」とし、両親への報恩をその理由としている。「仏法を学せん人、知恩報恩なかるべしや。仏弟子は必（ズ）四恩をしって知恩報恩（ヲ）ほうずべし。」①　日蓮の弘通は「父母の恩・師匠の恩・三宝の恩・国恩をほう（報）ぜんがために、身をやぶり、命をすつ…。此功徳は定（メ）て上（かみ）三宝、下（しも）梵天・帝釈・日月までもしろしめしぬらん。父母も故道善房の聖霊も扶（カ）り給（フ）らん。」②と述べているにも係わらず、両親への消息文が一通も残されていない。

また宗祖は「日蓮は安房の国東條片海の石中（いそなか）の賤民が子也。」③、「海人が子」④、「旃陀羅が子」⑤、「民が子」⑥と、自身の出自を述べられているが、「旃陀羅（せんだら）」階層の人々を教化救済されたという遺文が見い出せない。旃陀羅階層の苦悩は、日蓮聖人が最も理解され救済している筈である。しかし、その救済は記録に残らなかった。以上のそれ等と同じ様に、日蓮聖人の身辺を外護（げご）した人々の記録を宗祖は一言も語らないのである。語らないから、記録にない

から、その事実は無いと言うのではなく、人生や歴史には記録に残せない事実が多く存在するのである。直接的な記録には無いが、言い伝えられてきた伝承説話などから日蓮遺文を照覧すると、隠在する空白の部分が顕現してくる事がよくある。日蓮聖人を理解する上で、謎の部分を解明するヒントが伝承説話の中にある。解明する視点を真上からでなく、横から斜めからの視点が〈伝承学〉であり、日蓮伝承学である。

㈡

伊豆流罪を赦された日蓮聖人は、文永元年（一二六四）安房に帰省し、病母を見舞った。十一月十一日、地頭東條景信の襲撃を受けた。

「今年も十一月十一日、安房国東條松原と申（ス）大路にして、申酉の時、数百人の念仏等にまちかけられ候て、日蓮は唯一人、十人ばかり、ものゝ要にあふものはわづかに三四人也。いるや（矢）はふるあめのごとし、うつたち（太刀）はいなづまのごとし。弟子一人はうちとられ、二人は大事のてにて候。自身もきられ、打（タ）れ、結句にて候し程に、いかが候けん、うちもらされていままでいきてはべり。いよいよ法華経こそ信心まさり候へ。」⑦

「文永元年（甲子）十一月十一日頭にきず（疵）をかほり左の手を打（チ）をらる。」⑧

日蓮聖人自身は頭を切られ、左手に負傷をおった。弟子一人は即座に討ち取られ、二人は重傷を負った。日蓮一行十人のうち、応戦できる者は三、四人であり、鏡忍房と天津領主・工藤吉隆が日蓮教団最初の殉教者となった。この

法難を契機として、日蓮聖人警備の外護組織が教団としても整備されたに違いない。小松原法難に鏡忍房と共に獅子奮迅の戦いをした若き僧がいた。茂原の藻原寺に、祖師堂の隣に祀られている「華経房」の二僧である。法衣姿の鼻の高い「天狗」神である。おそらく清澄寺千年杉に代表される山岳信仰・修験道の天狗信仰から法華経に改宗した山伏系の人達であろう。清澄寺虚空蔵堂の下にある十一面観音堂に安置されている「カラス天狗」神が、その象徴である。その天狗神の出自となる山窩の山人達は、小湊の別所～天津～清澄～麻綿原～横瀬～星井畑～筒森～養老～小田代～月出～古敷谷～笠森観音～茂原～長柄の別所までの山岳ルートを支配圏にしていた。天狗信仰を持った山窩出身の修験者達が法華に改宗して、日蓮外護団に加わっていたと考えるべきである。ちなみにその華経房（天狗神）が身延山へ飛行自在する時、江戸の深川一乗院を休憩所にしていたと言う伝承は誠に興味深い。

㈢

佐渡流罪になった日蓮聖人を女性親子が文永九年（一二七二）の春に訪れる。宗祖は女性の信仰強盛なるに感激し、日蓮門下の女性として初めての「聖人号」を授与する。その女性とは、夫と早く離別し、幼き乙御前と二人で鎌倉に暮らす日妙尼である。

「日本第一の法華経の行者ノ女人なり。故に名を一ッつけたてまつりて不軽菩薩の義になぞらへん。日妙聖人等云々。相州鎌倉より北国佐渡ノ国、其ノ中間一千餘里に及べり。山海はるかにへだて山は峨峨、海は涛涛。風雨時にしたがふ事なし。山賊海賊充満せり。すく／（宿々）とまりとまり（泊々）民の心虎ノごとし犬ノごとし。現身に三悪道の苦をふるか。其上當世の乱世去年より謀叛の者国に充満し、今年二月十一日合戦。其より今五月のすゑいまだ世間安穏ならず、而ども一の幼子あり。あづくべき父もたのもしからず。離別すでに久し。かたがた筆

も及ばず、心辨へがたければとどめ了。」⑨

「（日蓮）御勘気をかほりて佐渡の島まで流されしかば、問ヒ訪フ人もなかりしに、女人の御身としてかたがた御志ありし上、我と来り給ヒし事、うつつ（現）ならざる不思議也。」⑩

この「日妙聖人御書」「乙御前御消息」に述べられる如く、世情は宗祖が予言された自界叛逆難の二月騒動（北条時宗と時輔の合戦）の動乱期である。佐渡への道中は山賊海賊、宿泊地の人心は「虎のごとし犬のごとし」の状況である。日蓮聖人の流罪は相模国依智より越後寺泊まで十二日間の行程である。これが七～十歳の幼子・乙御前を連れての旅は二十日間位かかる筈である。その往復の宿泊費は相当なものであり、日妙の年令は三十歳前後と考えられる。一番女性美のある年令である。そのような女性二人旅が、何の障害もなく無事に鎌倉～佐渡間を往復できる筈がない。日妙の俗姓、生歿年月日、身分、夫の姓氏は不詳であるが、夫は武士階級、宗祖に食物、金銭（鵞目）を布施することの出来る階級の人物であることは想像できる。日妙は佐渡へ出発する前に、鎌倉在住の日昭師に相談や報告をしていると考えられる。日妙の強情なる決意に、日昭師は日蓮外護団の人々を同伴させたのに違いない。前出の「日妙聖人御書」の一行前に次の如きの文章がある。

「十方分身の諸仏、上行無辺行等の大菩薩、大梵天王・帝釈・四王等、此女人をば影の身にそうがごとくまほり（護）給フらん。」

日妙尼と乙御前に影の如く身に沿って佐渡への道中を外護したのであった。宗祖は外護集団を「十方分身の諸仏、

本化の菩薩、梵釈」との仏語を用いて擬人的表現にしている。この表現は教学的には、翌年著わされる観心本尊抄に、強盛な信仰心は釈尊の功徳譲与となり、四大菩薩の守護へと連結するのである。

㈣

日蓮聖人を外護した人々・集団が裏の存在とすれば、六老僧周辺の人々は表の存在で、宗祖の身辺について日常生活の世話と外護役を兼ねる「共奉の一行にて有しかば同罪に被行て頚をはねらるべき」⑪

日蓮教団において、供奉の人々は年令に応じて諸役が配当されていたと考えられる。龍口法難時、三位公は供奉の一人として日朗師四人と共に土牢に収監される。この供奉の人々に四條金吾、池上、荏原、進士等の武家檀越及びその家臣が加わっている。

富木氏は宗祖の佐渡流罪に「入道と少僧達」を同伴させ、道中の外護に当らせている。

「此入道佐渡国可為御供之由承申之。可然用途云、かた〳〵有煩之故還之。御志始不及申候。人々如是申候。但囹僧等懸心候。」⑫

「去十月十日に付けられし入道、寺泊より還し候し時、書遣法門候き。推量候らむ。…貴辺に申付し一切経の要文、智論の要文、五帖一處に可被取集候。其外論釈の要文散在あるべからず候。…小僧達少々還候。此国為體、在所之有様可有御問候。難載筆端候。」⑬

富木五郎常忍は、佐渡流罪に入道と若き僧五、六名を派遣している。佐渡国塚原に到着後、十一月二十三日、五、六名の小僧達のうち、少々（二名ぐらいか？）を富木殿のもとへ還している。四條金吾も下人を遣わし、のち自身が佐渡に渡り、宗祖と法義を談じている。日蓮聖人の生家・貫名家も、宗祖のご舎弟・貫名藤平重友が佐渡まで外護団の一員として随伴したと伝承されている。

鎌倉在住の日蓮信奉者、妙一尼は「さじき尼」と称され、源頼朝が佐竹山域に由比ヶ浜を遠望できる淺敷を構えた所に住していた。日昭師の母とも、日昭の兄・印東次郎左衛門尉祐信の妻とも伝えられるが不詳である。しかし、日昭上人とは関係ある人物と考えられ、「妙一尼御返事」に「辨殿今年住鎌倉候歟。尼御前に参。」⑭と言われている。その妙一尼が宗祖佐渡流罪に「瀧王丸遣使之。…今施主妙一比丘尼（日蓮）貧道身扶命小童使之奉仕法華経女者。」⑮

「弟子等檀那等の中に臆病のもの、大體はをち（落）、或は退転の心あり。尼ごぜんの一文不通の小心に、いままでしりぞかせ給ぬ事、申ばかりなし。自身のつかうべきところに下人を一人つけられて候事、定釈迦・多宝・十方分身の諸仏も御知見あるか。」⑯

「さどの国と申、これ（身延）と申、下人一人つけられて候は、いつの世にかわすれ候べき。」⑰

妙一尼は佐渡と身延に下人・瀧王丸を派遣した。「瀧王丸＝小童＝下人」と宗祖は記されているが、小童を少年の如き若き童と理解するのは誤りである。少年の童児が寒き佐渡ヶ島に随伴したら、その少年の面倒を誰かが見なければならない。瀧王丸とは立派な成人で、宗祖の世話と身辺警護が出来る武士と考えるべきである。弘安五年の大聖

人の「御遺物配分事」には、「小袖一ッ、瀧王丸」記され、単なる雑用係ではなく名門の武家・印東家に仕え、日蓮の身命を外護した功績により「小袖一ッ」の御遺物が贈与されたと考察すべきである。前述の「富木入道殿御返事」の「小僧達」も同様に、年若き沙弥（しゃみ）の小僧ではなく、武術の心得ある成人の僧達である。中山で大聖人の百座説法を聴聞して、浄土教より法華経に改宗した唱行寺（太鼓の霊場）の首題坊日唱は、承久の乱に朝廷方に付いた名ある武士と言われ、日蓮の師、小湊西蓮寺（天台宗）二十一世道善房も朝廷方の北面武士であったとの伝承がある。そのような外護の人々が存在しなかったら、佐渡の塚原問答では、異教徒により大聖人は殺害されても不思議ではない。彼等の主人である富木入道、妙一尼の立場からみれば、彼等は「小童」であり、「小僧達」の存在であったが、護身の術を有した立派な成人達であった。日本には、船名や刀剣に○○丸と童名をつける慣習があるのと同一である。

㈤

日本中世史研究家の網野善彦氏は、「中世の非農業民」に注目し、次の如く述べている。

「供御人（くご）、神人（じにん）は神仏、天皇に直属する聖別された集団で、男女を問わず交通税を免除されて、広域的に遍歴して交易にたずさわった。…浄土宗、一向宗、時宗、日蓮宗にせよ「鎌倉新仏教」は悪人、非人、女性にかかわる悪、穢れの問題に正面から取り組もうとした宗教だった。…

一遍聖人に対し、非人・悪党たちが高札を立てて、一遍の布教を妨害してはならないと定めたので、一遍は布教活動が出来、世の中から山賊、海賊と扱われた「非人・悪党」たち自身が一遍を擁護し、その布教を支持した。」⑱

山人（やまかつ）（かりうど）・海人（あま）などは非人と定められ、その非人の中に「犬神人（いぬじにん）」が存在する。犬神人は神仏に

直属する「非人」で死穢を払う役を負う。御所・幕府・社寺の穢を払い清浄を保つのである。鎌倉八幡宮寺、日吉山王社、比叡山延暦寺、八坂祇園社などには、非人の犬神人が配属され下級神人となっていた。犬神人は褐色の上着・黄衣に白覆面の服装をしている。平安、鎌倉時代京都祇園社感神院に属し、延久二年（一〇七〇）後三条天皇のとき四条以南、五条以北の河原田畠を祇園社の管領に移し、この地域を社恩として非人に充て、犬神人は境内の清掃、祇園会の御輿の通路の浄めと警固、神輿の担ぎ役となった。「立正安国論」には、「於法然ノ墓所ニ仰付テ感神院ノ犬神人ニ令ム破却セ一」とあり、室町期には山門が法華宗の隆盛を妬み、犬神人に妙顕寺を破却させている。彼等は弓矢、弓弦ニ沓ヲ「弦練作」として行商し、「弦召」（つるめそう）とも呼ばれた。諸国に交通税を免除されて、山奥や川原で生活する漂泊民を紀野一義師は「道々の人」と位置付けた。⑲ 山窩を出自とする彼等は戦国時代前、各地の領主の権力の及ばぬ「公界」を維持していたと考えられる。山窩研究によれば、中部日本のサンカ拠点は八ヶ岳、富士山、房総である。昭和二十三年、サンカ研究の三角寛氏は、房総サンカの頭領・安房一氏と清澄山裏山で会い、サンカ伝承を取材している。サンカの重要拠点が清澄山であった。山窩の人々は里人が踏み入らない奥山を漂泊して、鉄などの鉱脈を発見し、タタラ製鉄の技術などを有していた。清澄は砂鉄の採掘できる場所であり、その鉱物を発育させる星神・虚空蔵菩薩、明星天子、妙見菩薩（天御中主命）を祀った聖域であった。清澄山系を水源とする夷隅川は「水銀・丹生」の豊庫であり、鴨根の清水寺はその拠点であり、夷隅川河口の太東岬は現在も砂鉄が豊富で、昭和三十二年頃まで昭和製鉄が稼働していた。清澄を水源として東京湾に注ぐ小櫃川流域の久留里町の「久留」は、朝鮮語の「クル」（鉄製食器）である。清澄山域はサンカの職種・「傀儡師」（あやつり人形を歌に合わせて舞う人々）が昭和の時代まで存在していた。日蓮聖人が小湊・清澄の旃陀羅や山窩の産鉄民、木地師などと交流があったことは充分考えられる。このセンダラやサンカの組織に日蓮聖人は、清澄在住の頃より外護されていたのである。日蓮聖人と同時期に活躍した遊行念仏の「一遍聖人絵伝」には、白覆面をした犬神人が描かれている。

㋑　三人の犬神人と非人の集団

㋑図は、「白覆面をした三人の犬神人と非人集団」である。小屋の屋根には「三つ巴」紋がある。これは彼等が産鉄民であることを証している。鍛治(かじ)神・金工神は「天目一箇命(あまのひとつのみこと)」に代表されるが如く「一つ目」で象徴される。古代産鉄炉・タタラ炉の火加減を炉の穴から見ることで目を痛め、片目になったのである。タタラ炉の炎（火）と牡鹿皮で作った鞴(フイゴ)（風）により砂鉄が製鉄となり、（水）で冷やされることにより、その鉄は鍛えられてゆく。製鉄の三要素が「火・風・水」である。その象徴が「三つ巴」の神紋である。

聖武天皇は仏教伝来以前の神々を仏教統治する時、その神々を王権の尖兵として利用し、古代産鉄神を不動明王に重ね合わした。不動明王は火処(ホト)（女陰）の中に立ち火焔を背負っている。降魔の利剣は砂鉄からの鉄鋼を表わし、剣は陽根(マラ)を表わし、不動の眼は片目だけで半潰れである。不動明王は陰・陽が和して製鉄を成し、「剣・火処(ホト)・片目」の産鉄神の要素を具備している。

㋺と㋩図は、白覆面の犬神人と非人集団である。

㋥図は、一遍聖人の臨終に駆けつけた三人の犬神人であり、腰には火打ち袋を下げている。褐色（黄衣）の上着に白覆面。

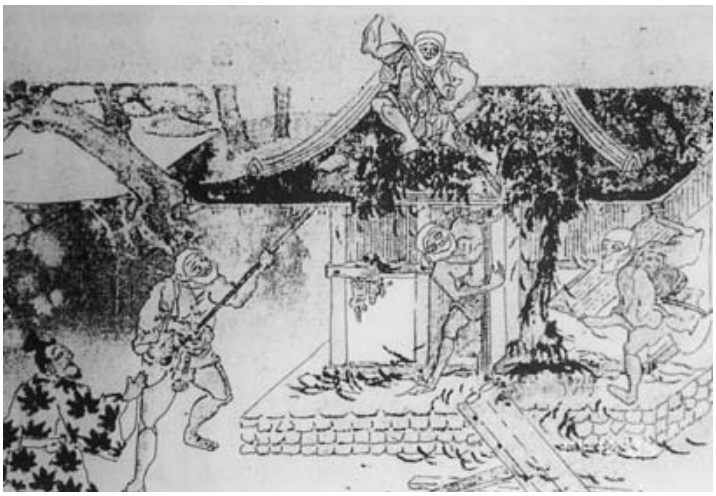
㋭図は、法然上人墓所を破却する感神院の犬神人。罪によって穢れた場所を壊し、焼却する処刑が当時行われていた。松葉ケ谷焼打ちの法難も、これと同一なるものか？　松葉ケ谷焼打ちの日蓮聖人を救出した白猿は、白覆面の犬神人の人々である。㋬図

㊐　犬神人と非人

㊅　犬神人と非人集団

㊁　一遍の臨終に駆けつけた三人の犬神人

犬神人、非人は寺社と深い関係を持ち、神の直属民「神人」（じにん、じんにん）、仏の直属民は「寄人（よりうど）」天皇の直属民になった人々を「供御人（くごにん）」と言う。供御は天皇・貴人の食べるものの意から、天皇の使うもの、更に諸品を貢納する人々を「供御人」と言い、その直属民は自ら「神仏の奴婢（ぬひ）」と言った。神仏に捧げる物品、金銭を初穂と言うが、「上分（じょうぶん）」とも言い、日吉（ひえ）神社への初穂は、日吉上分米、上分銭と表現された。日吉上分物を貸し出して金融を行う日吉神人、延暦寺の寄人が熊野上分物を貸し出して金融を行う熊野神人、熊野山伏がいた。伊勢神宮の上分物は、「御師（おし）」が取り扱い、伊勢の御師を「葉山大夫」と言い、伊勢神楽を連れて諸国に巡り「お札配り」と金融を行うことが出来た。葉山大夫は榎倉大夫家の分家筋に当り、江戸、安房、紀伊国に多くのスポンサー（檀家という）を有し



㋚　法然の墓所を破却する犬神人「拾遺古徳伝絵より」

㋛　日運聖人と白猿

ていた。日蓮聖人も父の貫名重忠を通じて、伊勢の御師・葉山太夫と関係があったと考えられる。犬神人・非人は死穢、処刑、罪のケガレを浄める仕事である。平安末期から死刑が復活すると、広い意味の非人の中に「放免」という集団がいる。罪を犯し獄から放免された人は、のち天皇直属の官庁・検非違使庁の下部となり、罪人の逮捕、処刑、葬送にたずさわった事が、「今昔物語集」に記録されている。左因守、右因守という職名が検非違使の官職体系に見える。

㋛図は「法然上人絵伝」に安楽房が六条河原で切られた時の場面である。検非違使の一行に髭面の放免が描かれている。立烏帽子をかぶり、摺衣という派手な衣装をつけ長大な鉾を持って処刑場に現われる。実際に首を切ったの

は彼等である。日蓮聖人の龍口法難の時、首切り役人といわれる依智三郎直重とはこのような人物であったろう。放免は犬神人と同じように住居の破却にもたずさわっていた。京・加茂祭には、放免は鉾をもって「綾羅錦繡（りゅうらきんしゅう）」の派手な姿で行列に加わっている。日興上人の「御遺物配分事」によると、

一、御遺物配分事

註法華經一部十巻　辨阿闍梨
御本尊經體　釋迦立像　大國阿闍梨
御馬一疋　小袖一　佐渡公
御太刀一　小袖一、袈裟代五貫文　侍（和田丸）従公
衣一　小袖一　袈裟一　越前公
御馬一疋鞍皆具、御足袋一　頭鳥子小袖一　白蓮阿闍梨
御腹巻、銭三貫文　伊與阿闍梨
御馬一疋　小袖一　□鉾一　蓮華阿闍梨

㋩　「法然上人絵伝」より、髭面の放免と検非違使。知恩院蔵

蓮華阿闍梨日持上人は、「御馬一疋、小袖一、□鉾一」を拝領している。非人の放免が所持すると思える鉾を相続するのである。しかも日持上人の生家・松野六郎左衛門の家は「蔵人屋敷（くろうど）」（法蓮寺）と呼称されている。非人の山人（サンカ）や海人（センダラ）を管轄するのは「蔵人職（くろうどうしき）」と考えられ、松野氏祖先は「蔵人職」に任官していた

と考えられる。

網野善彦氏は、次の如く述べている。

中世の商工業者、金融業者や芸能民が、神仏・天皇の直属民という地位を持ち…全国的に、またはある特定の範囲を遍歴して市場から市場に歩き回っていた。神人は神仏に直属する者の独特な姿・黄衣を着して遍歴し、道や市場、更に津・泊・沖・浜・坂などの交通税は免除され、その境界的な場所は彼等の権利が支配していた。「神奴」、「菩薩の奴婢」、「寺奴」などと表現される神人、供御人、寄人などを、これまでの歴史家は非常に身分が低いと考えがちでしたが、当時の制度の中では、将軍の家臣である御家人と同じクラスの人である場合がしばしば見られる。社会的に見ると、神人、供御人は侍の身分に相当し、官位も持っていた。

神人や供御人は一般の平民・百姓とは、身分的にハッキリ区別され、神人の在家、その本拠地の家には、平民に賦課される課役は、免除される。

非人・犬神人の職能として芸能がある。犬神人は祇園祭には鉾を持って先頭に立つ。今は山鉾と言われ高い山車になっているが、古くさかのぼると、神の依代として長い棒だった。蔓が巻きついた変形の長い棒を放免がかつぐ、これが鉾であった。日蓮聖人より日持上人へ「御遺物配分」された鉾は、このようなものであったと考えられる。

京都の北に天皇の輿や柩を担ぐ八瀬童子がいる。この人々は青蓮院に属する炭焼きであったが、天皇の直属民となり、天皇家の隠密組織でもあった。成人組織でも「童子」と言う。彼等は平民の成人男子の髪型、髻（本鳥）を結ぶのでなく、髻を切られてざんばら髪・「蓬髪」である。名前に「○○丸」をつけ、童姿をしている。牛飼や馬借も天皇家や摂関家などの厩に属し、「舎人、居飼、御厩寄人」と呼ばれていた。

日蓮聖人の愛馬の口取りをしたと伝えられる熊王丸、瀧王丸などは、「日蓮聖人註画讃」の絵によると、童名、童

㋬

㋭

㋮

姿で描かれている。しかし真実は、彼等が立派な成人で武術を心得ている外護集団から選別された人物である。「註画讃」の絵に描かれる少年では、馬の口取りとして馬口の綱に手が届かないし、馬が暴れたら押え静める事が出来ない。写真㋮が真実の姿である。（「一遍上人絵伝」）

寺泊には房州小湊と同じく非人・旃陀羅の人々が多く居住し、山窩の人々と交流した泊（とまり）であったと考えられる。「日蓮聖人註画讃」において、佐渡への流人船が海のシケで沈没する危機に、宗祖が「波題目」を海面に書き、竜神を鎮める様子が描かれている。このとき船縁（ふなべり）に二人の童子が現われ船の危機を救うのである。

この時の守護神が「童姿（わらわすがた）」で描かれている。二人の童児とは、寺泊において宗祖の教化を受けたベテランの漁師

団、日蓮聖人と同じ出自の旃陀羅（せんだら）集団の人々が荒海の航海を助けたことを表しているのである。日蓮伝承において、外護集団の存在を内密にするために「童姿」として、その存在を描くのである。㋐宗祖が「寺泊御書」を記した当地の代官・石川宇右衛門吉広は、非人集団の管理権を有していたと考えられる。重須本門寺を建立した石川能忠・孫三郎と同じ河内源氏の一統・縁者であるのか、研究を待ちたい。

㋐

㈥　日蓮聖人の外護人・外護集団

日蓮遺文や伝記集、伝承で日蓮聖人の外護人の人々は、その地域にそれぞれ存在している。

(1)　清澄寺―浄顕房、義浄房とその弟子達。

(2)　小湊―貫名衆と西蓮寺衆

(3)　東條郷―男金藤三郎・新太夫入道（日向上人兄と伝わる）（産鉄関係、妙見社）

(4)　笠森観音―定住の山窩（サンカ）と産鉄民

(5)　その他―工藤吉隆、鏡忍房、進士太郎、椎地四郎、王日、熊王丸、瀧王丸、八幡宮鶴若、阿仏房など。

―山窩（サンカ）・旃陀羅（センダラ）を束ねることの可能な集団―

(6)　茂原衆―藻原寺華経房、斉藤兼綱、小林民部、隅田五郎、丸家一族、長柄町の別所（東光寺）…上総茂原は承久

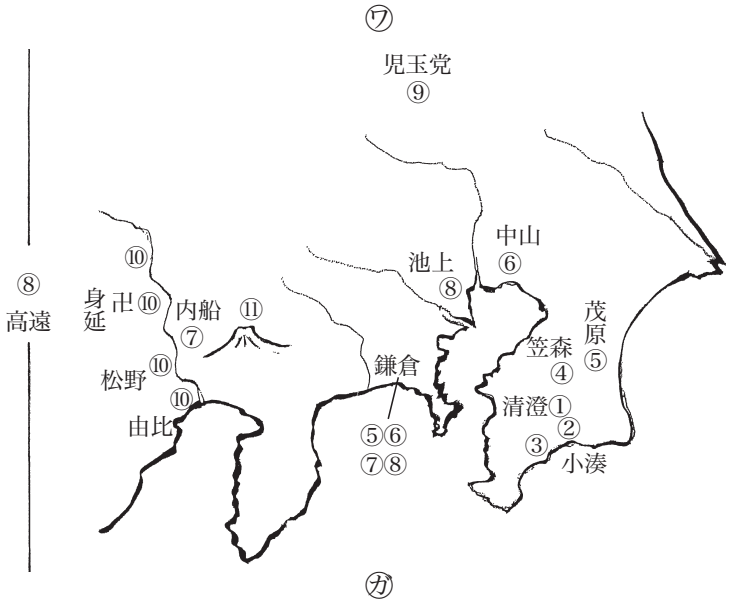
の乱朝廷方の総大将・藤原秀康の領地であった。

(7) 中山衆―富木胤継、太田乗明、曽谷教信等及びその家臣。

(8) 四條衆―宗祖の待医集団。

(9) 池上衆―池上宗仲・実長。作事奉行としての伐採衆。信州高遠の非持山池上衆。

(10) 児玉衆―児玉党の久米一族（神流川（カンナ）域の産鉄民の頭領か）、佐渡流罪の宗祖を警護して佐渡に渡りて移住する。佐渡の北新保に七二軒の児玉家あり。児玉の東光山玉蓮寺は宗祖宿泊の霊跡なり。



(11) 富士川流域衆―高座石の妙法二神（妙太郎・法太郎の天狗集団で身延の先住者と考えられる）。久本房日元は宗祖の甲州巡化を先導し山伏を教化する。宗祖を富士山経ヶ岳に法華経の埋経を案内する。波木井家の公達（きんだち）。大井庄司（日興上人の父）。芝川の河合入道。内船の四条金吾。内房の東林房、仏象房。松野六郎左衛門（日持上人の父）。由比家（日興上人親戚）。

(12) 富士衆―富士浅間社の御師（おし）・塩谷平内、渡辺越後、渡辺藤兵衛。文永六年五月、久本房日元の紹介で宗祖を富士

経ヶ岳に案内する。写真⑦

以上の日蓮聖人外護人・外護集団を関東地図上に記すと㋕の如くである。

地図上の外護人・外護集団を見ると、その人々が宗祖と同じ鎌倉に居住し、宗祖危機の時は、

①鎌倉―金沢六浦―中山富木胤継邸―葉山小壺―鎌倉

②清澄―小湊―笠森―茂原―富木邸

③身延の上流・下流の富士川は、日蓮外護団がポイントを押え、文永・弘安期には、身延山が最も安全であった。

㋕図の避難ルート①・②が確保されていたと考えられる。末法に於ける法華弘通は、値難することによって本化菩薩として認知され、法華真実が証明されるという法華経の構成上（予言性）、法華経弘通者は「殺される」訳にはいかないのである。法難の危機より復活し、法華真実の具現者とならなければならない。「日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頚はねられぬ。此は魂魄佐渡の国にいたりて」⑳蘇（よみがえ）らなければならないのである。

「法華経の行者あらば必三類の怨敵あるべし。三類はすでにあり。法華経の行者は誰なるらむ。求（メ）て師とすべし。…㉑

我並（ヒニ）我弟子諸難ありとも疑（フ）心なくわ自然に仏果にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ。現世の安穏なら

ざる事をなけかざれ。」㉒

日蓮聖人は、法華経の弘通→迫害値難→本化菩薩の自覚→諸天の守護→法華真実の証明のために「殺される」訳にはいかないのである。そのために宗祖自身も教団も、法華経行者の身の安全と外護集団・避難ルートの確保は当然の事であったと考えられる。

㈦

日蓮聖人が建長五年（一二五三）四月二十八日立教開宗時、地頭東條景信に擯出され逃れた笠森観音は、延暦三年（七八四）伝教大師最澄により開創された。観音堂は長元元年（一〇二八）後一條天皇の勅願により建立された日本唯一の「四方懸造（かけつくり）」堂である。上総の国司が京より赴任して長南の笠森を通りかかったとき、田植え姿の娘に出会う。その娘の顔は後一條天皇が亡くした皇后にそっくりであった。早速に京に報告し、宮中にその娘を奉職に遣わすと、帝は大変喜び、娘「於茂利（おもり）」の願いを聞き届けた。娘は言う、「私の村の観音様はお堂がなく露座に安置され、雨が降ると、村人が笠を観音様にかけて濡れるのを防いでおります。何卒観音様が入るお堂をお建て下さい。」

後一條天皇の勅願として、高く聳える岩盤上に支柱で支える舞台堂、日本唯一の「四方懸造（かけつくり）」堂が創建された。田植えの娘は箕作（みつくり）りを家業とする家の娘であった。「箕作（みつくり）り」は山窩（サンカ）の代表的仕事である。農作業で使う大きな籠の一種である。この箕作りが一人で出来るようになれば、山窩の世界では嫁に行けると言われる程の代表的な仕事である。平安時代末期には笠森観音近くに定住する山窩集団がいた事が証明されるのである。小湊の旃陀羅→清澄の山窩→笠森の山窩への連絡網が、山窩の歩く「山窩道」に確立されていたのである。立教開宗時に笠森観音へ避難された日蓮聖人の道は、まさに「山窩道」であった。そして旃陀羅と山窩の非人集団が日蓮聖人の外護集団の中に、姿を見

せずに存在していたのである。彼等は鉱物を発見する産鉄民系の山窩であり、鉱物を地中において発育させると考えられていた虚空蔵信仰（明星天子）を抱いた山の民であった。その拠点が房州清澄であった。清澄寺において蓮長法師の吐血した「凡血の笹」の笹は、鉄・鉱物を産鉄用語の笹で表現しているのである。写真㋾

㋾　笠森観音堂

㈧

日蓮聖人の外護集団で名前が表に出る人がいる。宗祖の布教活動を見て入信し、のち寺院を建立したのが佐渡の地頭・相州依智の豪族本間重連と鈴木弥太郎貞勝（刀鍛冶）である。本間重連は自宅跡と伝えられる場所に三ヶ寺（妙純寺・蓮生寺・妙伝寺）建立している。鈴木貞勝は龍口法難に使用された刀剣（蛇胴丸）の制作鍛冶と伝承され、龍口より依智への道中に座間郷の自宅で宗祖に休息頂いた所から休息山円教寺を建立した。境内に榧（かや）の古木があり、平安・鎌倉時代には榧の実の油を刀剣の錆止めに使用していた。武家の古い家には今でも榧の木が植えられている。紀野一義氏は本間重連の出自を鋭く考察している。

「本間六郎左衛門は風水を弁え、「水龍環抱（すいりゅうかんぽう）」という大吉相、河川の蛇行に包まれている土地は富貴をもたらすの考えから上依知に居を構え、北に依智神社、南に熊野神社を祀る場所を選んだ。六郎左衛門の本姓は畑、波多

でなかったか。渡来人秦氏の一族で彼もまた「道々の人」であった。依智の地名はおそらく秦一族の根拠地、琵琶湖の東「愛智郷」を支配していた依智（朴市）秦氏に由来する。その辺りは木地師の根拠地、現在の愛東町小倉から神崎郡永源寺町政所谷にかけての小椋庄は、五十五代文徳天皇の皇子惟喬親王（母は秦系・紀一族の娘静子）を始祖とする木地師の本所であった。橋本鉄男氏は木地師について推論を展開している。「ろくろ」（もの）と人間の文化史・法政大学出版局）秦氏の流れの畑六郎左衛門と名乗る木地師が関連した範囲は、武蔵・能登・飛騨・加賀・越前・近江・丹波と七ヶ国に及び（123頁）、六郎左衛門とか六郎の名は「ろくろ」に基づいた仮託である（124頁）…。本間六郎左衛門の邸は佐渡国府にある。そこは波多郷であり、後方に塚原三昧堂がある。」（取意）㉓

本間氏・鈴木氏も秦系の木地師・産鉄民で関東に進出した。秦一族は現在の神奈川県秦野市を中心に勢力を固め、海老名に進出し海老名姓を称したと考えられる。秦野には非人の拠点が「境別所」として残り、伊勢原の阿夫利神社・大山不動も彼等の山岳信仰拠点となった。箱根・小田原には惟喬親王が下向し、早川近くに紀伊神社を創建し産鉄・木地師の拠点となった。現在の小田原・箱根の寄木細工の木地師の祖が惟喬親王であり、代々の宮総代も小椋氏である。惟喬親王に随従した木地師は故郷の小椋庄より「小椋姓」となり、福島に移住した会津塗りの木地師もほとんど「小椋姓」である。箱根宮の下には産鉄系木地師が信仰する、虚空蔵菩薩を拝す山として命名された「明星ヶ岳」がある。

本間六郎左衛門重連は、承久の乱（一二二一）後、佐渡の守護職が北條一門の大仏宣時となり、その被官組織に組み込まれ一門ゆかりの依智に邸を構え鎌倉幕府に勤仕した。そこで龍口法難の日蓮聖人と遭遇したのである。鎌倉で宗祖の噂を聞き、その出自を知り、産鉄系山窩と旃陀羅を教化救済する日蓮聖人を見て、本間重連も鈴木貞勝も改宗

したに違いない。

山形県酒田の日本一の豪農・本間家は、越後・敦賀より酒田に来住したと記録されている。その前を尋ねると相模国愛甲郡依智本間村（現・金田）がその出身と酒田本間系図にある。本間六郎左衛門の商業範囲と情報網は想像を越える。道々の人・産鉄民・山岳修験道・木地師などの祖先の職種要素が、江戸時代の総合商社・本間家を形成するのであろう。

㈨

日蓮聖人の外護集団には、いろいろの人々が関与している。

(1) 日蓮聖人に仕える鎌倉武士の祖先をみると、その多くは宮中・天皇に仕えた方の子孫である。

(A) 富木胤継の祖先・土岐光信は鳥羽天皇の四天王の武士。鳥羽法王が久安元年（一一一三）比叡山横川の智印法師に命じて勅願寺として建立したのが岩本実相寺である。富木胤継の父・光行は後鳥羽院西面の武士、母の下総局は千葉胤正の女であり、太田乗明、曽谷教信は一族と伝わる。

(B) 池上宗仲の始祖は藤原忠平卿と言われ、延長八年（九三〇）～天慶四年（九四一）に摂政を務める。「八幡宮造営事」には「親と云ひ我身と申し、二代が間きみ（君）にめしつかはれ奉リて、あくまで御恩身なり」㉔とあり、後嵯峨天皇の皇子・鎌倉将軍の宗尊（むねたか）親王とその子、惟康（これやす）親王に仕えている。池上本門寺祖師像胎内筒銘には、「散位、大中臣宗仲。清原家女」とある。大中臣は古代律令体制下では伊勢神宮の祭主・宮司識であった。清原家とは皇后宮の有識故実の明経博士で大進（だいじょう）家と言う、曽谷教進の子を大進阿闍梨日進（身延三世）と言うは、それに関係するか。

清原教隆は建長四年（一二五二）宗尊親王に従って下向す。明経学を世襲し大政官、摂政、院庁の枢機に参与

する家柄である。北條実時は清原教隆を師とし、書籍を蒐集して金沢文庫を開いた。この時同じく宗尊親王に随行した近衛武士が、のち重須地頭となり重須本門寺を開く石川新兵衛宗忠と石川孫三郎能忠の父子である。宗忠の先室は宇都宮泰綱の女（妙大）、後室は南条兵衛七郎の二女（妙一）で南条時光の姉である。このように鎌倉御所（将軍家）を中心に池上家、清原家、石川家、南条家、宇都宮家は、日蓮聖人に理解を示し、外護集団の一組織であった。その他、四條金吾頼基（中務氏）も北條一門の江馬光時に仕官しながら、医家武士として、鎌倉将軍家と関係し、宗祖の外護集団の有力武士であった。

(2) 日蓮聖人は鎌倉時代の非人と言われる階層の人々を教化救済している。旃陀羅（センダラ）・山窩（サンカ）と言われる人々は文字が識読できず、日蓮聖人は直接彼等に語りかけているのだろう。それが旃陀羅・山窩の人々に日蓮遺文が現残しなかった理由の一つである。宗祖が自身「旃陀羅が子なり」と表現されると、彼等はそれだけで魂が救われたに違いない。日蓮聖人の偉大な教化法である。彼等は日蓮聖人の身辺を警護することを自ら志願したに違いない。それだけ日蓮聖人から感動を受け救われたのである。日蓮聖人の宗教の特徴は今まで余り注目されないが、外で大声で拝むことである。「堂外叫唱」である。立教開宗は旭ヶ森で大声で初唱題を行い、名越の草庵では山中で唱題し、鎌倉住人は呪言と間違えたと伝える。「種々御振舞抄」によると、龍口法難の召し捕りに「日蓮さきがけしたり、わとうども（我党共）二陣三陣つづきて」と叫び、更に「日蓮大高声を放（チ）て申（ス）。あらをもしろや平（ノ）左衛門がものにくるうを見よ、とのばら（殿原）但今ぞ日本国の柱をたをす」と。八幡宮社頭に於いては「日蓮云（ク）各々さわがせ給（フ）な。…馬よりさしをりて高声に申（ス）やう。いかに八幡大菩薩はまことの神か。…いそぎ（急）いそぎこそ誓状の宿願をとげさせ給べきに、いかに此処にはをちあわせ給（ハ）ぬぞ、とたかだか（高々）と申（ス）。…天照太神・正八幡こそ起請を用（ヒ）ぬかみ（神）にて候けれと、さしきりて教主釈尊に申（シ）上候はんずるぞ。いた（痛）しとおぼさば、いそぎいそぎ御

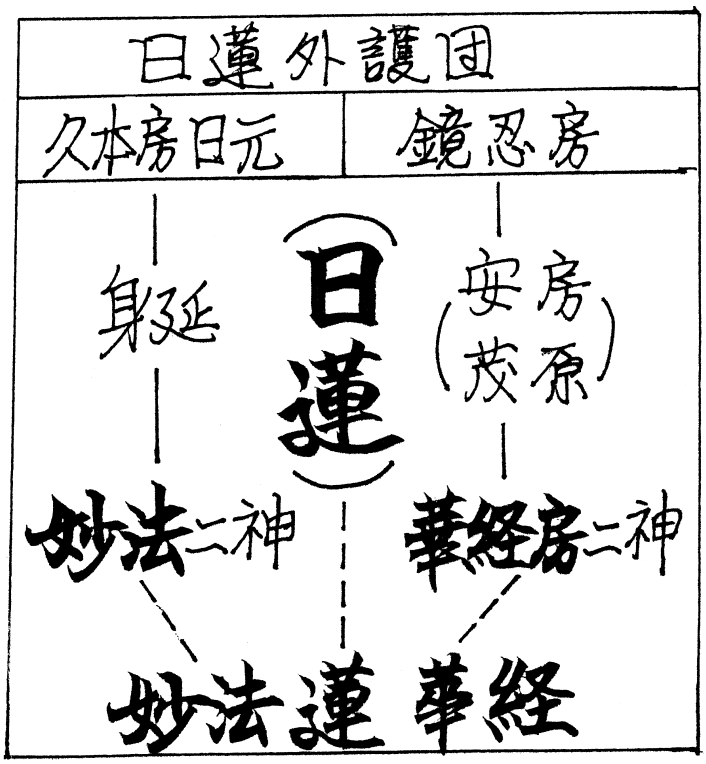
計（ラヒ）あるべし。」

依智本間邸において「夜中に大庭に立（チ）出でて月に向ひ奉（リ）て…いかに月天いかに月天と、せめしかば、其（ノ）しるしにや、天（そら）より　明星の如（ク）なる大星下（リ）て前の梅の木の枝にかかりてありし」とある。日蓮聖人の大高声は迫力があり、聞く者の魂を揺さぶると同時に、その堂外叫唱は姿を見せない非人の外護集団に、宗祖自身が危機状況を伝え、非常呼集の伝達方策でもあったと考えられる。

佐渡塚原三昧堂にては、「夜は月星に向ひ奉（リ）て諸宗の違目と法華経の深義を談じ」、一谷に移ってからは、「夜もひるも高き山に登（リ）て、大音声を放（ッ）て上を呪咀し奉る。其音声一国に聞ふと申（ス）。」ほどの迫力ある堂外叫唱であった。「一遍上人絵伝」（国宝）によると、日蓮聖人と同じく非人衆を教化した時宗の一遍聖人は、弘安二年（一二七九）頃、富士門流日目上人の小野寺家本貫地である下野国小野寺館を非人を連れて訪れている。祖父の小野寺太郎左衛門大夫こと新田太郎重房と父の新田五郎重綱（妻は南条兵衛七郎時継の姉・蓮阿尼）も非人を束ねる力を持ち、日蓮聖人の外護集団の有力武士であった事は充分考えられる。この地は現在の栃木県都賀郡岩船町大字小野寺であり、清澄と同じく星神信仰（日月星の三光天子）の太平山（おおひらさん）（山岳修験）の西麓にある。太平山は、この地方の山窩住民の拠点でもあった。日目上人は一族の帰依者を得て法華堂を建立し、祖祖父の小野寺道綱が建久二年（一一九〇）平泉の残党・大河次郎兼任を討伐し、源頼朝より地頭職を賜った奥州新田郡へ布教に向かわれたのである。

日蓮聖人の外護集団には、山窩出身の山岳修験道の人々が存在していたと考えられる。身延に於いては久本房日元を首領とする外護集団を「妙法二神」として象徴し、房州に於いては鏡忍房を首領とする外護集団を「華経房（かきょうぼう）二神」と象徴したと考えられる。日蓮聖人を左右から「妙法」と「華経」の外護集団が守護している。偶然にも妙法蓮華経の五字が外護集団論において完成している。㋺妙法二神信仰は小室山妙法寺、岩本実相寺、池上本門寺にも広く祀られている。華経房二神は宗門的にはまだ広く認知されていない。写真㋟にあるが如く、妙法二神は恐ろしい形相と護

㋟　妙法二神



㋡　日蓮聖人と白猿

身武器を具している。宗祖の佐渡流罪には幕府の警護役人のほか、日興・日向・日持・日頂その他の弟子、宗祖から教化を受けた山窩・旃陀羅系より外護集団に入った「道々の人々」、久米一族、四条・富木氏等の下人、貫名家関係者など一五～二十名位の外護集団が随伴しなければ、道中の野武士・異教徒の襲撃を防ぐことは不可能である。もうそろそろ彼等の存在と功績を宗門的に認知する時期が到来していると考える。

註

①開目抄　五四四頁

②報恩抄　一二三九頁

③善無畏三蔵抄　四六五頁
④本尊問答抄　一五八〇頁
⑤佐渡御勘気抄　五一一頁
⑥中興入道御消息　一七一四頁
⑦南條兵衛七郎殿御書　三二六頁
⑧聖人御難事　一六七三頁
⑨日妙聖人御書　六四七頁
⑩乙御前御消息　一〇九八頁
⑪頼基陳状　一三五一頁
⑫寺泊御書　五一五頁
⑬富木入道殿御返事　五一七頁
⑭妙一尼御返事　七二二頁
⑮右同　七二二頁
⑯辨殿尼御前御書　七五二頁
⑰妙一尼御前御消息　一〇〇一頁
⑱網野善彦著『日本の歴史をよみなおす』
⑲紀野一義著『日蓮』
⑳開目抄　五九〇頁
㉑開目抄　五九九頁

㉒開目抄　六〇四頁
㉓紀野一義著『日蓮』
㉔八幡宮造営事　一八六七頁